

要な食料としての肉は基本的には焼いて食べたと考えられるが、西日本などで発見される礫群などは、蒸し焼きを行うための施設ともいわれる。なお、前述のように西日本ではこの時期、冷温帯落葉広葉樹林が発達しており、理論的にはクルミ、クリ、ドングリなど縄文時代には食料としていた堅果類の捕食が可能であるが、それを加工するための石器が未発達なことなどから、その可能性を裏づけることが出来ない。

第三節 九州の旧石器時代遺跡

概観

九州の旧石器時代遺跡の調査は佐賀県の唐津地域を嚆矢として比較的早い段階から開始され、

一九六〇年代には大分県の早水台遺跡や丹生遺跡が前期旧石器時代論争の中心となるなど注目されてきた。特に旧石器時代の主要な石材である黒曜石（佐賀県腰岳など）や安山岩（佐賀県多久など）、流紋岩（大分県祖母・傾山系）が豊富に供給されることから、現在まで多くの遺跡が調査され、さまざまな分野からの研究がなされている。しかし、関東地方のように編年のひとつの尺度となる火山灰の発達した地域が限られることや、重層的に生活の痕跡が確認できる遺跡が少ないなど、決してフィールドとしては恵まれているわけではない。

とはいえ後期旧石器時代に見られるように各地の特徴的な石

材を用いた遺跡の分布は、その地域性や集団のテリトリー（行動領域）といった遺跡の構造論を論じるにはかえって好都合であり、阿蘇山や始良カルデラなどを供給源とする広域テフラ（火山灰）の存在は、石器の編年に一つの時間的な基準を与えるという意味で重要である。

こうした観点から、過去に複数の研究者によりその変遷が論じられてきたが、ここでは吉留秀敏の論考（吉留二〇〇一、二〇〇四）をもとに変遷の概要について紹介しておきたい。まず、九州地方では主要な石材の産地が各地で確認されており、そのエリアに符合するように遺跡の集中が見られる。石器の製作に際してはそれに適した石材が必要で、たとえば同じ金属の素材であっても、鉄は重くて飛行機など軽さが求められる製品には適さないし、アルミは強度の問題でタンカーなどの製造には向かない。石器についても同様で、使用する石材は規則的に割ることができ、その割口が鋭いことや細かな加工ができる岩質といった条件がある。こうした条件に合うものとしては黒曜石（佐賀県腰岳、長崎県針尾島など）、安山岩（佐賀県鬼ノ鼻岳など）、流紋岩（大分県大野川中流域、宮崎県五ヶ瀬川流域など）、チャート、珪質頁岩などが知られる。したがって、こうした石器製作に適した石材が産出する地域に遺跡の集中が認められ、九州全域で一六地域を抽出することが出来る。これらはその集中範囲が径五〇⁺程度であり、前述の集団のテリトリー（行動

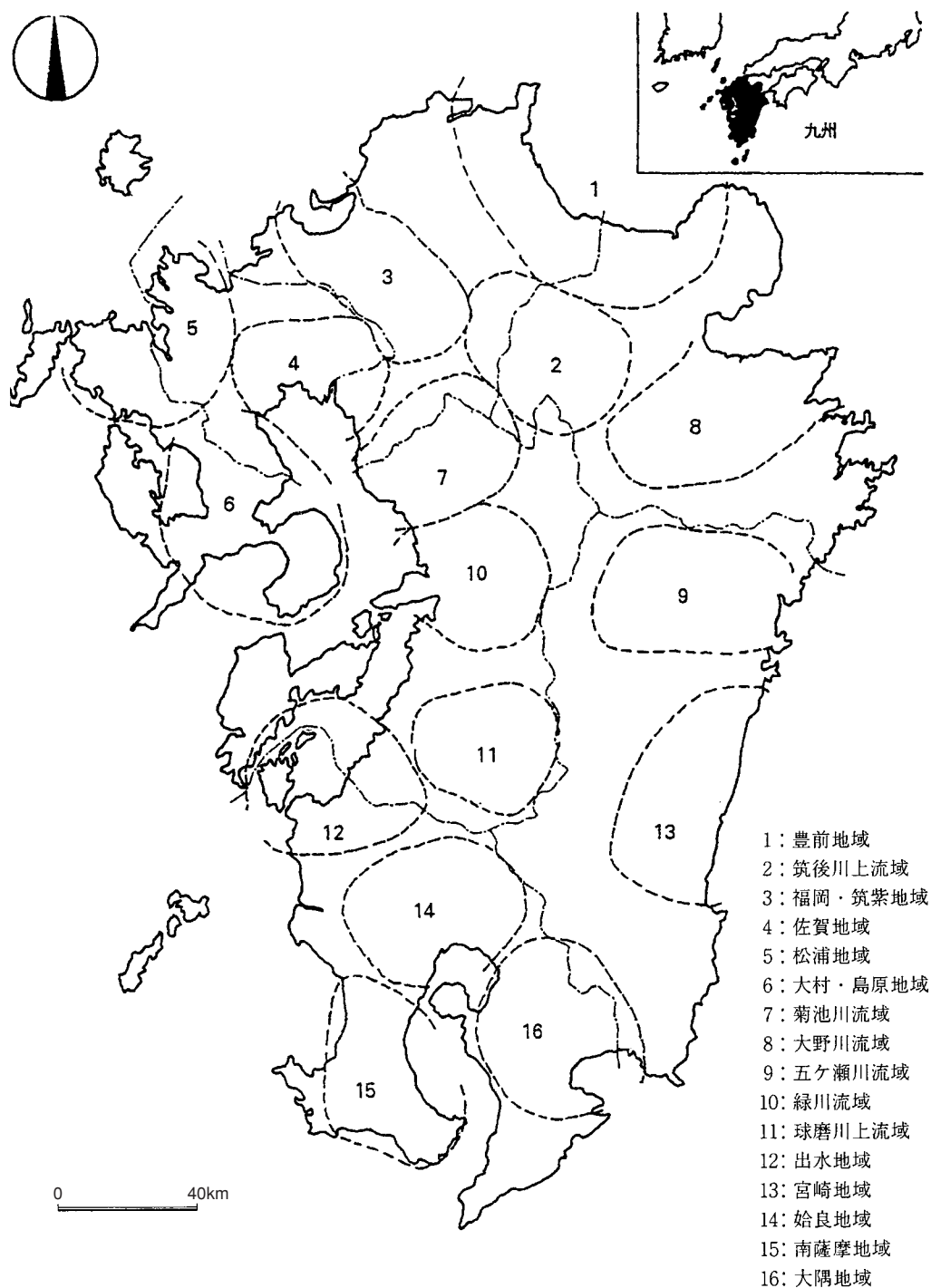


図2—6 九州の遺跡群分布図（吉留 2004「行橋市史 上巻」）

領域)を示していると考えられている。更に、これらに地域から出土する石器をその形や技術的な特徴から分類し、時間的な変遷を示すと以下のように推察することが出来る。

まず、最も古い段階としては中期旧石器時代、後期旧石器時代初頭で、長崎県福井洞穴の第一五層出土の石器群が四万年、三万年くらい前の時期とされる。次いで後期旧石器時代初頭とされるのが熊本県石の本遺跡、下横田遺跡、曲野遺跡の例で、斜軸尖頭器という粗雑な槍のような石器と、台形様石器を特徴としている。その後ナイフ形石器を主体とする段階がA・Tと呼ばれる火山灰層(約二万四〇〇〇年前)の前後から認められるようになり、長崎県百花台遺跡E地区Ⅶ、Ⅵ層、大分県百枝C遺跡第Ⅲ文化層、熊本県狸谷第Ⅰ文化層などで出土している。更に、ナイフ形石器に剥片尖頭器、角錐状石器といった大型の槍先形石器を伴う段階へと変遷し(大分県百枝遺跡、福岡県宗原遺跡など)、最後に細石器を主体とする石器群が現れ、やがて縄文土器が出現する。こうした変遷は先に述べた関東地方のそれとほぼ共通するもので、地域的な特徴を加味しつつもその流れは大過ないものといえる。では私たちの故郷、京築地域においてはどのような遺跡が知られているのであろうか。

京築地域の旧石器時代遺跡

県内の旧石器時代遺跡についてはその有効な遺跡包含層である火山灰の堆積が顕著でないことなどから、重層的に石器群が認められる遺跡はほとんどな

い。しかしながら福岡平野や筑紫地域、遠賀川流域、北九州地域などでは多くの遺跡を認めることができ、その様子が少しずつ明らかになっている。京築地域についても同様であるが、つい一〇年ほど前までは数えるほどの遺跡しか知られていなかったものが、最近の圃場整備や道路関係の調査が進むに従い、確実にその発見数は増え、現在四三箇所で確認されている。それでも単発的な資料の発見例がほとんどで、石器群として捉えられるものはごく限られた遺跡である。石器群とは先に述べた当時の生活の拠点として利用された場所で、石器の製作の様子が分かるような複数の資料(石核、剥片、碎片、製品など)で構成された石器の総体であり、その地域の石器文化を知る上で有効な資料である。したがって石器群の分析を行うことでより多くの情報を得ることができ、京築地域ではそうした遺跡が少ないのが現状である。以下、その代表的な遺跡について知りうる限りの内容を示したい。

青畑向原遺跡(豊前市)

国見山陵から派生した、標高四二メートルの丘陵先端部に位置する。本田池南の丘陵部が遺跡で、一九九三年に県営圃場整備に伴い、豊前市教育委員会が調査を行った。遺跡は旧石器時代と縄文時代の石器多数が認められたが、明確な生活遺構は検出されず、わずかに旧石器時代のものと思われる焼石や木炭片など



図2—7 京築地域の旧石器時代遺跡分布図

表2—1 京築地域旧石器時代遺跡地名表

No	遺 跡 名	所 在 地	出 土 石 器	石 材	備 考
1	御手水原遺跡	勝山町御手水	剥片	赤チャート	4号古墳
2	黒田地区遺跡群	勝山町下黒田	石核、剥片、縦長剥片	赤チャート、石英、ob、an	第3地点第Ⅱ、Ⅵ区
3	池田地区遺跡群	勝山町池田	スクレイパー	an	第5地点
4	椿市廃寺	行橋市福丸	ナイフ形石器	ob（腰岳）	第4次調査
5	下崎ヒガンデ遺跡	行橋市下崎	台形石器	ob（腰岳）	
6	入覚大原遺跡	行橋市入覚	ナイフ形石器	ob（腰岳）	C、D地区
7	幸越遺跡	行橋市大谷	スクレイパー	珪質岩	
8	柳井田早崎遺跡	行橋市泉中央8丁目	ナイフ形石器	ob（姫島）	
9	鬼熊遺跡	行橋市南泉5丁目	ナイフ形石器	珪質岩	
10	代遺跡	行橋市高瀬	ナイフ形石器	ob（腰岳）	
11	稲童石並遺跡	行橋市稲童	ナイフ形石器、石核、剥片	ob（姫島）、タンパク石	
12	渡筑紫C遺跡	行橋市稲童	台形様石器、石核、剥片	珪質岩、水晶、瑪瑙	遺物集中分布
13	稲童豊後塚遺跡	行橋市稲童	剥片	珪質岩、ob（腰岳）	
14	雨窪遺跡	苅田町雨窪	ナイフ形石器、槍先形尖頭器、彫器、剥片	ob、珪質岩、水晶	
15	富久遺跡	苅田町富久1丁目	ナイフ形石器	an	
16	新津原山遺跡	苅田町新津	細石刃、スクレイパー、剥片	ob（腰岳、姫島）、an、凝灰岩	
17	後谷池遺跡	椎田町奈古後谷池	ナイフ形石器	ob（腰岳）	
18	原遺跡	椎田町上り松原池	細石刃核	ob（針尾島）	
19	出口遺跡	椎田町上り松出口	横長剥片、縦長剥片	an	
20	越路六郎遺跡	椎田町越路	スクレイパー、石核	赤チャート	
21	越路貴船遺跡	椎田町越路	彫器	珪質岩	
22	越路北ヶ崎遺跡	椎田町越路		ガラス質 an	
23	十双遺跡	築城町安武	石槍	an	
24	長養池遺跡	豊津町豊津長養池	台形様石器	ob	
25	徳永川ノ上遺跡	豊津町徳永	ナイフ形石器、三稜尖頭器	an、ob	
26	徳政宮ノ上遺跡	豊津町徳政	スクレイパー	珪質岩	
27	鋤先遺跡	豊津町徳永	剥片	珪質岩	
28	フカキ遺跡	犀川町花熊	石核	珪質岩	
29	青畑向原遺跡	豊前市青畑	剥片尖頭器、ナイフ形石器、スクレイパー、剥片	an、ob、ch	
30	薬師寺塚原遺跡	豊前市薬師寺	三稜尖頭器	an	
31	小石原泉遺跡	豊前市小石原	尖頭器	石英？	
32	荒堀大保遺跡	豊前市荒堀	ナイフ形石器、剥片、石核	珪質岩	
33	下河内大水口遺跡	豊前市下河内	ナイフ形石器	珪質岩	
34	吉木芦町遺跡	豊前市吉木	ナイフ形石器	ob	
35	長田遺跡	新吉富町宇野	スクレイパー、剥片	珪質岩、ob（腰岳、姫島）	
36	下唐原新池遺跡	大平村下唐原	細石刃核	ob	
37	下唐原十足遺跡	大平村下唐原	ナイフ形石器	珪質岩	
38	にごり池畔遺跡	大平村下唐原	ナイフ形石器	ob（姫島）	
39	池田池畔遺跡	大平村百留池田池	細石刃核	流紋岩	
40	桑野遺跡	大平村下唐原桑野	ナイフ形石器	流紋岩	
41	上の熊遺跡	大平村下唐原上の熊	剥片尖頭器	an	
42	金居塚遺跡	大平村下唐原金居塚	ナイフ形石器、石核、剥片	an、赤チャート、石英	遺物集中分布
43	なび松池遺跡	大平村下唐原なび松池			

ob = 黒曜石 an = 安山岩 ch = チャート

が出土した。このうち旧石器時代の資料はナイフ形石器三点、剥片尖頭器一点、スクレイパー一点、縦長剥片一点、剥片八点などで、細石刃と思われるものも一点含んでいた。出土状況からすれば、資料はいずれも原位置を保っていないと思われる、自然の作用による二次的な遺存状況を示していると思われる。

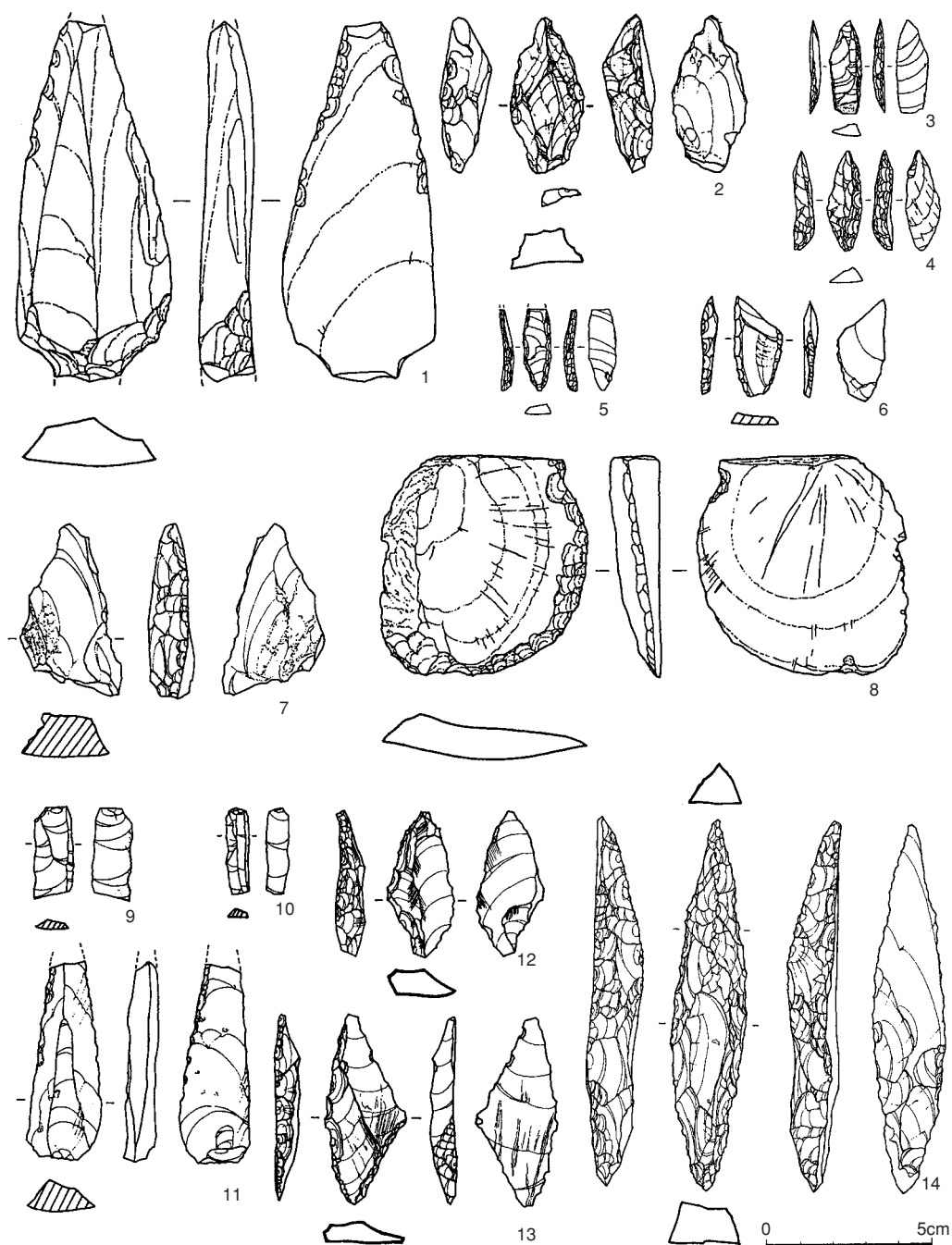
ナイフ形石器はいずれも小型のもので、両側縁若しくは片側側縁全部と反対側の側縁の一部に、ナイフ形石器の特徴である刃潰加工（ブランディング加工）を施している。全長二一―二八釐程度で、腰岳産黒曜石と良質の透明な石英を用いる。剥片尖頭器は先端部と基部を欠くものの、現存で全長九四釐を測る大型のもので、安山岩の先端のつがった縦長剥片を素材とし、基部にノッチ状の二次加工を施し、形を整えている。スクレイパーは安山岩の不定形剥片を素材とし、側縁に細かな二次加工を施している。縦長剥片は先端を欠くものの、そのまま使用されたと思われる、現存長五二釐を測る。安山岩製。細石刃と思われるものは、腰岳産黒曜石を用い、全長二二釐、幅六釐を測る。細石刃に特徴的な桶状剥離が認められることや、頭部調整が見られるなど細石刃としての要件を備えており、細石核の出土はないものの細石刃として差し支えないかもしれない。剥離は安山岩を用いた不定形のものが多く、定型化した剥片剥離技術を見いだすことはできない。

本遺跡の資料は小型ながら縦長剥片を用い、かつ剥片尖頭器

を含むことから、後期旧石器時代の後半期の様相を示している。また、比較的まとまった資料にも拘わらず石核の出土がないことなどから、ある程度定住化した集落ではなく、狩猟時の移動ポイントとも考えられる。いずれにせよ、豊前地域の旧石器時代の様相を示す貴重な資料である。

金居塚遺跡（大平村）

山国川の左岸、標高四〇ほどの河岸段丘上に所在する。段丘は中津面と呼ばれる中位段丘で、下末吉期（六―一三万年前）に形成されたと考えられている。調査は一九九〇年に一般国道一〇号線豊前バイパスの建設に伴い、周知遺跡である金居塚古墳群の調査を目的として実施されたが、その際、墳丘下層の調査によって旧石器時代及び縄文時代の石器群が検出された。石器群は古墳の墳丘下という、いわばパッキングされた状態で検出されたため原位置を保つ極めて良好な資料で、京築地域では初めての本格的な旧石器時代資料として注目された。その中心となるのは三号古墳下層から検出されたもので、近接する一号、二号古墳のものを含め、都合一〇二点にも上る資料が得られた。ただ、資料の分布状況からすれば、古墳の造成や、これに伴う周溝の掘削などかなりの資料が失われたことは容易に想像でき、本来かなりの数の石器群が存在していたと考えられる。そうした意味で、本地域の拠点的な旧石器時代集落が存在



1～11 青畑向原遺跡 12 吉木芦町遺跡 13 下河内大水口遺跡 14 薬師寺塚原遺跡
1 剥片尖頭器 2～7・12・13 ナイフ形石器 8 スクレイパー 9・10 細石刃 11 剥片 14 三稜尖頭器

図2—8 京築地域の旧石器時代石器(1) (豊前市)

したと考えられる。

さて、前述のように検出された石器群は都合一〇二点で、その内訳はナイフ形石器五点、石核四点、使用痕のある剥片一点などで、これに剥片、碎片が伴う。ナイフ形石器はいずれも一側縁に刃潰加工を施すタイプで、全長三〇～五〇^{ミリ}ほどの比較的小型のものが多く、石核は打面を移動しながら目的剥片を得る多面体のタイプで、剥片剥離工程の最終的な段階のものと考えられる。

本石器群で注目されるのはその使用石材で、赤チャートが全体の三六・三%を占める。次いで珪質岩の二一・六%、水晶の一八・六%、安山岩（サヌカイト系）が九・八%見られた。また、腰岳産の黒曜石も三〇点認められたが、混在する縄文時代の石器と区分できないこと、黒曜石を素材とする旧石器時代の石器が認められないことなどから、ここでは除外した。さて、問題は赤チャートで、従来いくつかの遺跡で剥片などが散見的に認められていたが、製品である定型化された石器（ナイフ形石器など）が見られなかったことから、旧石器時代の使用石材として疑問視されていたものであった。しかし、今回赤チャートを主体とした石器群が検出されたことから、本地域における旧石器時代の主要石材として今後注意しなければならないし、またいくつかの遺跡で散見的に認められることは、本地域でも予想以上に旧石器時代遺跡の広がりがあることを示している。

渡筑紫遺跡C地区（行橋市）

平成十三年（二〇〇一）、工業団地の造成に伴い調査が行われた。標高一二^{メートル}余の中位段丘に所在し、眼前に周防灘を望む海岸部に程近い場所に位置する。数年前には付近で終末期古墳が発見されており、立地条件は良好である。段丘上には厚さ一^{メートル}ほどの阿蘇IV起源の火山灰や薄い風化火山灰が認められた。

行橋市域では初めての原位置を保つ石器群で、石器の分布状況から見て単独のブロックを想定できる範囲から一五〇点余の資料が確認された。使用される石材は水晶、石英、チャート、安山岩、黒曜石で、なかでも水晶が全体の八割ほどを占めるという特異性を示す。製品である石器としては尖頭状石器、台形様石器、削器などが認められるが、石器群全体に占める割合は極めて低い。また、その出土層位は土壌分析の結果AT下位であり、石器群の様相と一致する。京築地域で層位的に認められたAT下位の石器群としては初見であり、今後本地域の旧石器研究で基準となりうるものである。なお、石器群の八割を占めるという水晶の原産地としては直線距離で一^{キロメートル}に満たない観山（標高二一^{メートル}）が有力で、他にはナウマン象やシカ属の化石が発見されている青龍窟のある平尾台や貫山などが知られる。

こうした地域の特徴を示す石材の顕在化は注意すべきで、この他にも金居塚遺跡で示した赤チャートも同様である。すでに

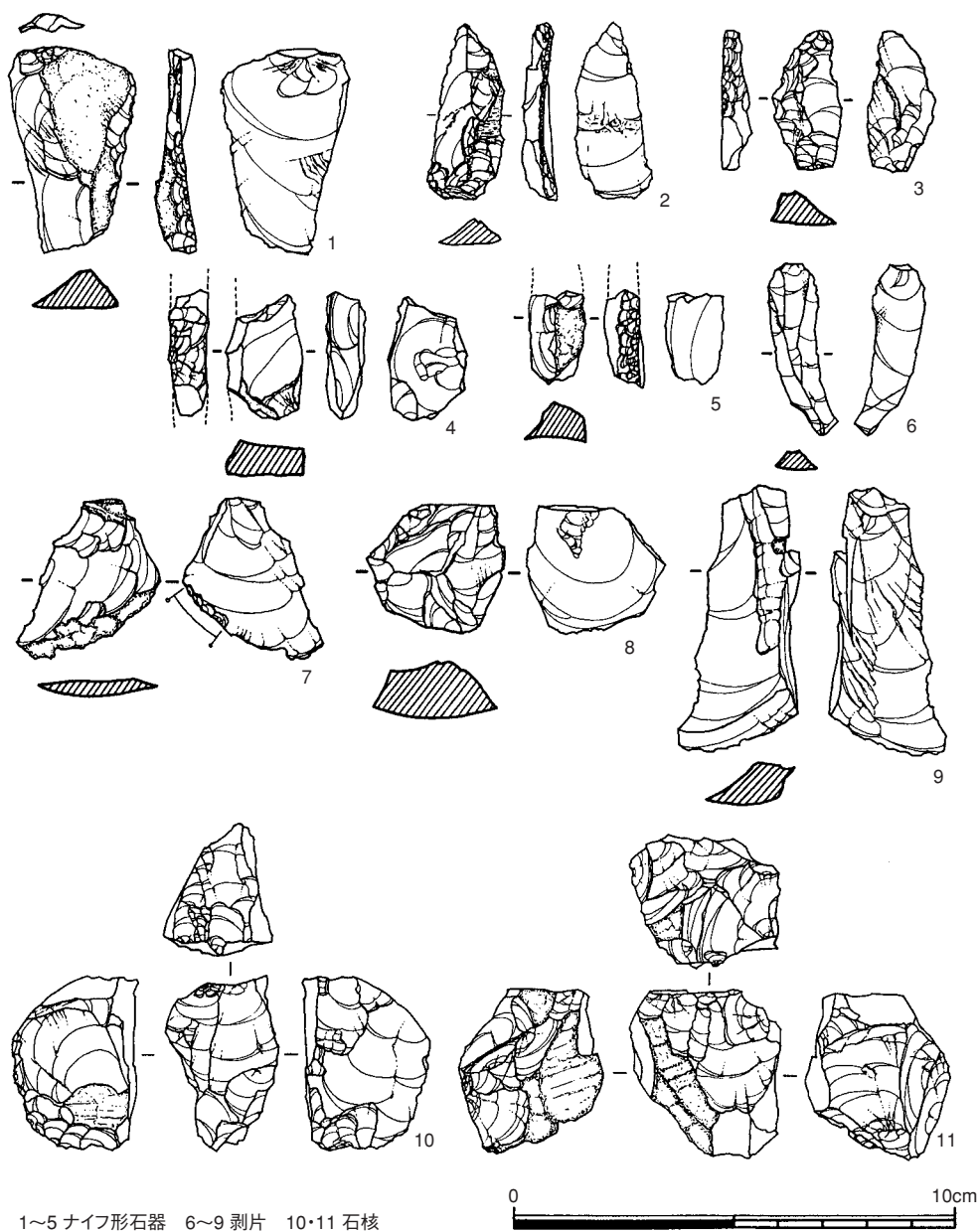


図2—9 京築地域の旧石器時代石器2) (金居塚遺跡)

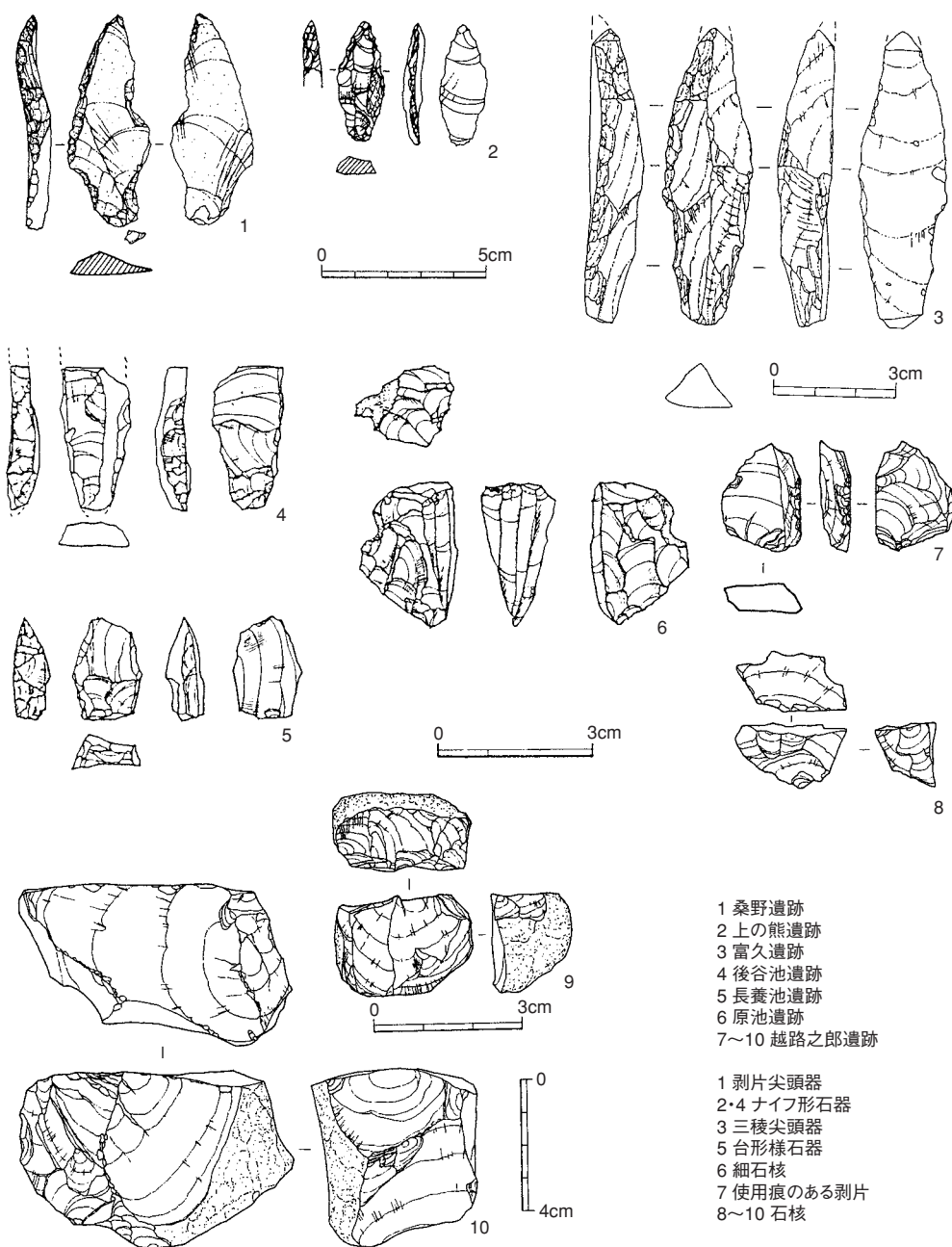


図2—10 京築地域の旧石器時代石器(3) (築上郡、京都郡)

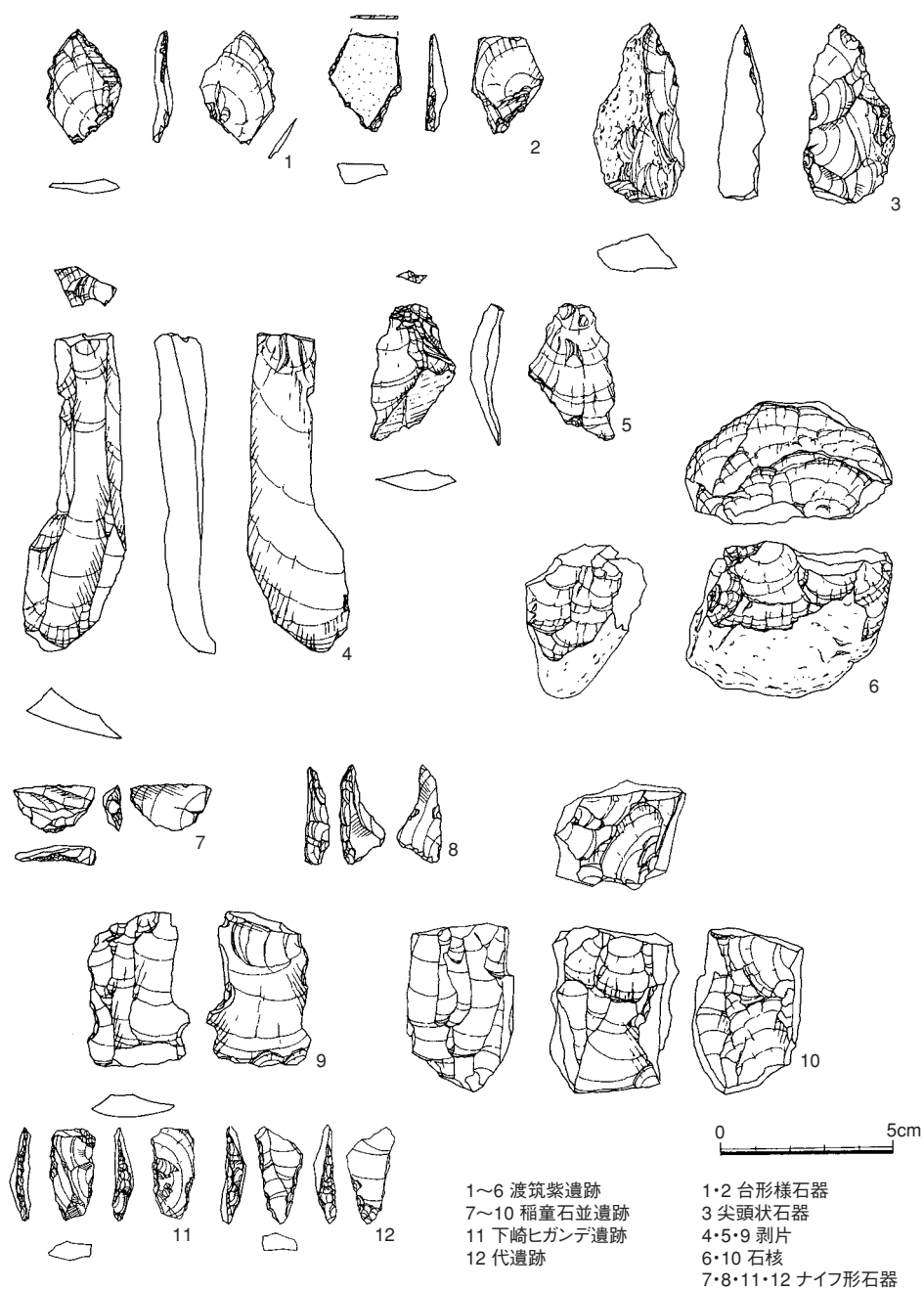


図2—11 京築地域の旧石器時代石器(4) (行橋市)

述べたように本地域の旧石器時代遺跡の発見は、単発の資料が違う時代の遺構に混入した状態で発見される例が多く、ナイフ形石器など定型化した製品の出土では容易に判断できるものの、剥片などは縄文時代や弥生時代のそれと区別がつかない場合が多い。つまり、一定の時期に特定の地域で使用される石材は、その石材の出土が時代の特定に結びつくと言う意味で有効といえる。したがって、今後本地域での調査において、水晶や赤チャートという石材を注意することにより、更なる旧石器時代遺跡の認識が可能となるのである。

以上、石器群として認定のできる三つの遺跡について詳述したが、こうした資料を前提として京築地域の旧石器時代資料を概観すれば、その中心となるのはナイフ形石器を主体とする時期である。ただ、辻田遺跡（北九州市）などでは近年斜軸尖頭器を伴う石器の存在が報告されていて、中期旧石器時代の可能性について指摘する向きもある。

さて、現在のところ本地域で最も古い時期の遺跡として認識できるのは渡筑紫遺跡で、A T下位の後期旧石器時代初頭と考えられるが、ナイフ形石器が不在であり、台形様石器に代表される石器群である。これに続く時期に明確なナイフ形石器を伴う金居塚遺跡、更に次の段階として剥片尖頭器を伴う青畑向原遺跡が位置付けられる。その後、葉師寺塚原遺跡（豊前市）で出土している三稜尖頭器の段階を挟んで、原遺跡（椎田町）に

見られるような細石器の段階へと続く。このようにして、大まかに見て二万五〇〇〇年～一万三〇〇〇年前の京築地域の様子が浮かび上がってくる。

その後、時代は土器の出現とともに縄文時代（新石器時代）へと移り、新たな歴史の段階へと進む。吉木常末遺跡（豊前市）に見られるような縄文時代早期と呼ばれる時期で、この間、細石器と縄文土器の共伴する縄文時代草創期の例は認められないが、前述の細石器段階の遺跡には、草創期の可能性を否定できないものもある。

第四節 勝山町の旧石器時代資料

はじめに

旧石器時代については前述のごとくその遺跡数が他の時代と比べ圧倒的に少ないことから、人類の誕生という世界的な視野から話を進め、日本列島での出来事、九州での状況とあまり勝山町とは関係のないような範囲の話に終始した。しかし、郷土の歴史を紐解くうえで、その過程はどうしても記述する必要がある、それを踏まえない限り私たちの祖先の話は説明できない。以上の理由を理解いただき、最後に勝山町域の旧石器時代遺跡の紹介をしたい。

勝山町内において埋蔵文化財の調査が本格化するののは昭和六十年代以降である。それ以前には定村責二（故人）などによる